

LESSON 2

シニア犬の フードを知る



人間と暮らす犬たちにとって、日々の栄養となる食事は、
飼い主が与えてくれる食べ物しかない。
適切なフード選びが愛犬の健康を左右するだけでなく、
飼い主との幸せな暮らしにもつながる。
フード選びのポイントと、老化防止に効果のある抗酸化栄養素について学ぼう。

文／編集部 撮影／牧野慎吾(P55-55,商品除く)
監修／坂根弘(獣医師、ブルーバックスロージャーナル株式会社学術部部長)

シニアフードへの 切りかえのポイント

1日の必要エネルギー量は
個体差あり。環境因子でも変わる

前のページで一般的に犬が1日に必要なエネルギー量を求めるための計算式を紹介したが、この数値は重要な目安にはなるが、人間に「太りやすい人・太りにくい人」がいるように、犬の場合も必要エネルギーには個体差がある。また、室内より屋外で生活している犬のほうがエネルギー要求量は多く、猟犬や盲導犬・聴導犬などの使役犬や競技会や品評会に出場する犬など、運動量やストレスの多い少ないによっても、必要エネルギー量は変わってくる。

過剰エネルギーは肥満の原因になるので、日ごとの体重測定など、飼い主の観察が大切だ。とくに注意したいのが、ライフステージの変わり目で、小・中型犬の場合は「発育期」から「成犬期(維持期)」

に入る1歳前後と「高齢期」に差しかかる7歳から8歳ごろ。さらに12歳から13歳ごろにも、ぐっとエネルギー要求量が減る。

愛犬の食事が急に減ると、飼い主としては心配で、無理に以前と同じ量を与えたくなくなってしまいが、ここでは注意が必要だ。ライフステージの変わり目に差しかかった犬が、本能的に摂取エネルギー量を制限している可能性がある。また、人間に忠実な賢い犬ほど、飼い主を喜ばそうとして無理に食べ過ぎてしまうことが多いので、とくに注意が必要だ。

市販されている一般的なドッグフードには子犬用、成犬用、高齢犬用などの区別のほか、体重管理用のフードなどもある。ライフステージの変わり目を見極め、適切なフードを選んであげることが、飼い主の大切な役目だ。

認知機能障害

柴犬がかかりやすい
「認知機能障害」

10歳の柴犬、小次郎の飼い主は「こんな不安も口にしていない。夜鳴きをするようになったので困っちゃって、もしかしたら認知症になってしまったのかな……」

7歳以上の犬の約半数は、加齢による行動変化を示すことが知られている。いわゆる「問題行動」で屋内で粗相をする・攻撃行動に出る・無駄吠えをする・認知機能障害症候群などだ。小次郎の夜鳴きは、体のどこかに痛みがある(骨関節炎等)など、原因があった上での行動かもしれない。その場合は問題を取り除いてあげれば解消されるだろう。ただ、原因が見当たらない場合は認知機能障害の可能性もある。

いわゆる認知症は高齢犬によく見られ、飼い主が「何だかちよっとおかしい。以前と違ってきたな」と思っているうちに少しずつ進行していく。認知症を見極める症状がいくつかあるので、愛犬をチェック

柴犬がかかりやすい認知機能障害とは

近年、長寿の犬が増えることでとくに多くの症例が報告されるようになったのが、老犬の認知症(認知機能障害症候群)だ。ある調査によると、ほかの犬種に比べて柴犬の症例が群を抜いて多く、「柴犬は認知症にかかりやすい」と言われているが、その理由はわかっていない。愛犬の認知機能障害に気づくためのポイントは下の通りだ。

犬の認知機能低下の症状例

症状	具体例
見当識障害	家族を他人と識別できない
	自宅や生活していた環境を認識できず混乱する
相互関係の変化	意味のない往来。行き止まりの場所から脱出できない
	家族を出迎えなくなる。名前を呼んでも反応しない
睡眠パターンや活動の変化	なでられたり、注意を引いたりすることを望まない
	外に行こうと「せがまない」
しつつけを忘れる	日中の睡眠が長く、夜間の睡眠が短くなる
	夜間に吠えて、室内を徘徊する
しつつけを忘れる	トイレしつけ(排尿/排便のコントロール)を忘れる
	覚えていた「芸」を忘れる

撃するなど、体にプラスの働きをしにくくなるのだが、過剰に発生すると細胞を酸化させ、組織の機能低下を招いて老化やガンなどの病気の原因になることがわかっていく。その老化のひとつとして、脳の細胞が破壊される認知機能障害があるのではないかと、アルツハイマーと血管性の認知機能障害の2種類があるが、犬の場合、アルツハイ

マーはなく、血管の障害によるものとされている。愛犬が認知症になってしまったら飼い主は何もできないのかというと、そんなことはない。先ごろある程度の認知機能障害であれば食事で改善できるという画期的な研究結果が出された。それによれば、オメガ3脂肪酸や抗酸化栄養素を強化した食事を与えた犬、脳の機能低下を防ぐことができたのだ。ならば、若いうちからそのような食事を与えておけば、認知症を防ぐ効果も期待できそうだ。魚油などに多く含まれるオメガ3脂肪酸は腎臓にもよいとされ、なかなか頼もしい栄養素といえそう。高齢犬では、健康と病気の予防のために必要な栄養素をしっかり含んだ食事を選ぶことが極めて重要になってくる。元気が穏やかな時間が1日でも長く続くよう、家族が気をつけてあげたい。

